ほぼ週刊コラム「Partnership論」　その４５

**Solidarityとは何か（２）：教皇ベネディクト十六世の回勅（2009年）では…**

2013.05.10　齋藤旬（[www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp)）　rev.4

**Subsidiarity概念は完成の域に達したが、Solidarityについてはもう一踏ん張り必要**　…というようなことを先回話した。今回は、Solidarityをテーマとする回勅の最新版であり、且つ、退任したベネディクト十六世の執筆では最後となる回勅：『[*Caritas in Veritate*](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.htmll)（真理に根ざした愛、英語ではCharity in Truth）』の中からSolidarity定義の部分を拾うことにする。

まずこの回勅の背景にある事柄をザッと説明しよう。そもそもカトリック教会が「社会教説（Social Doctrine of the Church）」づくりを開始し、世俗的事柄について発言し始めたのは19世紀末の1891年のこと。西洋の経済においてマルクス主義と資本主義という「新しい事柄」が生まれた頃のことだ。当時の教皇レオ十三世が、回勅『[*Rerum Novarum*](http://www.vatican.va/holy_father/leo_xiii/encyclicals/documents/hf_l-xiii_enc_15051891_rerum-novarum_en.html)（新しい事柄）』を書いて、すごく端折っていうなら、「カトリックとしてはどちらの主義もお勧めしない」という意見を述べたことから始まった。

**マルクス主義と資本主義という経済主導原理について論じたシリーズは百年間続いた**。  
1891年、レオ十三世、『*[Rerum Novarum](http://www.vatican.va/holy_father/leo_xiii/encyclicals/documents/hf_l-xiii_enc_15051891_rerum-novarum_en.html" \t "_blank)*（新しい事柄）』  
1931年、ピオ十一世、『*[Quadragesimo Anno](http://www.vatican.va/holy_father/pius_xi/encyclicals/documents/hf_p-xi_enc_19310515_quadragesimo-anno_en.html" \t "_blank)*（四十周年）』  
1961年、ヨハネ二十三世、『*[Mater et Magistra](http://www.vatican.va/holy_father/john_xxiii/encyclicals/documents/hf_j-xxiii_enc_15051961_mater_en.html" \t "_blank)*（七十周年）、意味はmother and teacher』  
1971年、パウロ六世使徒的書簡、『*[Octogesima Adveniens](http://www.vatican.va/holy_father/paul_vi/apost_letters/documents/hf_p-vi_apl_19710514_octogesima-adveniens_en.html" \t "_blank)*（八十周年）』  
1981年、ヨハネ・パウロ二世、『*[Laborem Exercens](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_14091981_laborem-exercens_en.html" \t "_blank)*（九十周年）、働くことについて』  
1991年、ヨハネ・パウロ二世、『[*Centesimus Annus*](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_01051991_centesimus-annus_en.html)（百周年）』  
の百年間、経済主導原理関連の議論が続いた。

1989年ベルリンの壁崩壊、1991年ソ連崩壊だから、冷戦終結をもってこの*Rerum Novarum*シリーズは一応の終結が打たれた格好だ。

なお、しばしば取り上げる[「Subsidiarityの定義」](principle%20of%20subsidiarity%20rev4.doc" \t "_blank)は上から二番目の社会教説回勅、即ちこの議論の最初の方のものだ。「小さな下位組織が為し得る事柄を、大きな上位組織にアサインすることは、不正義であり、同時に権利秩序の攪乱であり深刻な悪そのものである。」というこの原理、すごく端折っていうなら「個人主義」、これはWestern Christianityにとっては「論ずるまでもない」ほど当たり前なことだということが、この事からも分かる。

**社会教説シリーズにはもう一つある**。それは、経済だけでなくもっと広く人類社会の発展を論じたもの。ラテン語でPopulorum Progressio、英語でDevelopment of Peoples、日本語で言えばその意味は「人々達の発展」という回勅が1967年に発布されて始まった。

1967年といえば、カトリックの宗教改革であるバチカン公会議（1962年―1965年）が終わった直後のことだ。第二次世界大戦は終わったが冷戦が本格化する頃、即ち、1968年春にソビエト連邦軍主導のワルシャワ条約機構軍による軍事介入がチェコのプラハに侵攻し、冷戦が本格化する頃のことだ。

　「どちらの主義もお勧めしない」というカトリックが、「じゃーどうすればいいのか」本格的に考え始めた。

　それが先回紹介したSolidarityシリーズ：

（１）1967年教皇パウロ六世『*[Populorum Progressio](http://www.vatican.va/holy_father/paul_vi/encyclicals/documents/hf_p-vi_enc_26031967_populorum_en.html" \t "_blank)*　邦題：諸民族の進歩推進について』、

（２）1987年教皇ヨハネ･パウロ二世『*[Sollicitudo rei Socialis](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_30121987_sollicitudo-rei-socialis_en.html" \t "_blank)*　邦題：真の開発とは』、

（３）2009年教皇ベネディクト十六世『*[Caritas in Veritate](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.htmll" \t "_blank)*　邦題：真理に根ざした愛』、

の三つの回勅だ。

　Solidarity概念の形成と実現の、（１）種まき、（２）発芽、そしてリーマンショックを受けての（３）「育成を急ぎましょう」提案、の現在までの所で三つの回勅だ。

　今回はこの（３）「育成を急ぎましょう」提案の中にあるSolidarity定義を拾う。

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

**連帯の原理（Principle of Solidarity）とは何か。**

**2009年発布の教皇ヨベネディクト十六世回勅**

**「*[Caritas in Veritate](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.html" \t "_blank)***真理に根ざした愛**」37,38段落**

**20130510　和訳　by　齋藤旬　rev2**

**37.**　教会の社会教説は常に、正義は経済活動の全ての面に適用されなければならないと主張してきました。なぜなら、経済活動は常に、人間とその必要（needs）に関係するからです。資源配分、資金調達、生産、消費、その他の経済サイクルの全局面は、必然的にmoralの含意を帯びます。従って、経済における全ての決定はmoral的帰結を伴います。社会科学と現代経済の方向性は同じ結論を示しています。もしかすると、かつては富の創造はまず経済にゆだねられ、それから富を分配する仕事は政治に割り当てられると考えることができたかもしれません。しかし今日ではそれはより困難でしょう。なぜなら経済活動はもはや領土に束縛されないのに、政府の権限は主に国内にとどまっているからです。従って正義の規範が遵守されるべきは、経済プロセスに随伴してでもなく、その展開後でもありません。その経済プロセスが展開される、正に最初の段階から遵守されるべきです。ですからSpaceが新たに創造されなければなりません。即ち、単なる営利ではない原理に従って行動することを自発的に選択しながらも、同時に、経済価値（economic value）の産出も犠牲にしないでいられる主体が、市場の中で経済活動を行う場（space）も、営利主体向けと同様に、創造される必要があります。また、宗教者や普通の人々のイニシアチブに起源を持つ多くの経済主体（economic entity）によっても、こうしたこと --- 即ち、単なる営利ではない原理による経済価値産出 --- が具体的に可能であることが証明されています。

**37.** The Church's social doctrine has always maintained that *justice must be applied to every phase of economic activity*, because this is always concerned with man and his needs. Locating resources, financing, production, consumption and all the other phases in the economic cycle inevitably have moral implications. *Thus every economic decision has a moral consequence*. The social sciences and the direction taken by the contemporary economy point to the same conclusion. Perhaps at one time it was conceivable that first the creation of wealth could be entrusted to the economy, and then the task of distributing it could be assigned to politics. Today that would be more difficult, given that economic activity is no longer circumscribed within territorial limits, while the authority of governments continues to be principally local. Hence the canons of justice must be respected from the outset, as the economic process unfolds, and not just afterwards or incidentally. Space also needs to be created within the market for economic activity carried out by subjects who freely choose to act according to principles other than those of pure profit, without sacrificing the production of economic value in the process. The many economic entities that draw their origin from religious and lay initiatives demonstrate that this is concretely possible.

グローバル時代において経済は、相互に大いに異なる様々な文化と結びついた様々な競争モデルに大きく左右されます。これらのモデルが生み出す様々な形態の経済企業（economic enterprise）は、互いに出会うことの意味を交換的正義（commutative justice）の中に見いだします。ですから経済生活には、財の等価交換の関係を規制するために契約が必要であることは疑いの余地がありません。更に経済生活には、正しい法（just laws）も必要ですし、政治によって統制される再分配の様々な形態（forms of redistribution）も必要です。そして何よりも、*spirit of gift*（与えるという精神）といった芳香ゆたかな活動が必要です。一見するとグローバル時代の経済は、最初の論理すなわち契約的交換（contractual exchange）を優先しているように見えます。しかし直接的か間接的かを問わず、グローバル時代の経済は、他の二つの論理、即ち、政治の論理および無条件で与えるという論理（the logic of the unconditional gift）もまた必要であることを示しています。

In the global era, the economy is influenced by competitive models tied to cultures that differ greatly among themselves. The different forms of economic enterprise to which they give rise find their main point of encounter in commutative justice. *Economic life* undoubtedly requires *contracts*, in order to regulate relations of exchange between goods of equivalent value. But it also needs *just laws* and *forms of redistribution* governed by politics, and what is more, it needs works redolent of the *spirit of gift*. The economy in the global era seems to privilege the former logic, that of contractual exchange, but directly or indirectly it also demonstrates its need for the other two: political logic, and the logic of the unconditional gift.

**38.** 私の前任者教皇ヨハネ・パウロ二世は、*[Centesimus Annus](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_01051991_centesimus-annus_en.html)*『新しい課題』という回勅の中でこの問題 --- グローバル経済には契約的交換の論理の他に二つの論理が必要だということ --- に注意を促しました。彼は、三つの主体（subjects）を持つシステムの必要性について語りました。それは、市場、国家、そして市民社会（the *market*, the *State* and *civil society*）の三つです。彼は市民社会を、兄弟愛と無償性の経済（an *economy of gratuitousness* and fraternity）のもっとも自然な舞台と見なしましたが、市場と国家をその様な舞台でないと否定したのではありません。今日、経済生活は重層化した現象として理解されなければなりません。各層において、その層に適した度合いと方法で、兄弟的な相互関係（reciprocity）が存在しなければなりません。グローバルな時代では、経済を無償性と切り離して考えることはできません。なぜなら、無償性は、経済の様々な当事者間に、Solidarityも、正義と共通善に対する応答責任も、促進し普及させるからです。無償性の経済が、経済民主主義（economic democracy）の特定且つ深遠な一つの形態であることは明らかです。Solidarityは、何よりもまず、全ての人に対して全ての人一人一人が持つ応答責任感（a sense of responsibility）のことであり、単に国家に任せれば良いといったものではありません。過去においては、まず正義を追求すれば無償性はそれに付随してくると考えられましたが、今日においては、無償性なくしては正義も実現できないといわなければなりません。従って、必要とされるのは、様々に異なった組織目的を追求する企業（enterprise）が均等な機会の下に自由に活動できることを可能にする市場です。即ち、利益を志向する私企業（profit-oriented private enterprise）や様々な種類の公企業（public enterprise）と並行して、相互扶助原則（mutualist principles）を基礎とし社会のための目的を追求する商業主体（commercial entities）が、根を下ろし自己表現する場がなければなりません。まさに、市場（marketplace）においてこれらの企業が相互に出会うことから、商行為がハイブリッド形態をとることが期待でき、それによって、ways of *Civilizing the economy*（経済の市民化の様々な方法）への気づき（attentiveness）を期待できるのです。この様な経済のケースにおいて、*Caritas in Veritate*（真理に根ざした愛、英語ではCharity in Truth）は以下の様なタイプの経済的イニシアチブに、形と構造（shape and structure）が与えられることを要求します。即ち、利益を拒絶せずとも、単なる等価交換の論理あるいは単なる利益追求の論理よりも、高次の目的を目指すような経済的イニシアチブに形と構造が与えられることを要求します。

**38.** My predecessor John Paul II drew attention to this question in[*Centesimus Annus*](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/encyclicals/documents/hf_jp-ii_enc_01051991_centesimus-annus_en.html)*,* when he spoke of the need for a system with three subjects: the *market*, the *State* and *civil society*[[92]](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.html" \l "_edn92). He saw civil society as the most natural setting for an *economy of gratuitousness* and fraternity, but did not mean to deny it a place in the other two settings. Today we can say that economic life must be understood as a multi-layered phenomenon: in every one of these layers, to varying degrees and in ways specifically suited to each, the aspect of fraternal reciprocity must be present. In the global era, economic activity cannot prescind from gratuitousness, which fosters and disseminates solidarity and responsibility for justice and the common good among the different economic players. It is clearly a specific and profound form of economic democracy. Solidarity is first and foremost a sense of responsibility on the part of everyone with regard to everyone[[93]](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.html" \l "_edn93), and it cannot therefore be merely delegated to the State. While in the past it was possible to argue that justice had to come first and gratuitousness could follow afterwards, as a complement, today it is clear that without gratuitousness, there can be no justice in the first place. What is needed, therefore, is a market that permits the free operation, in conditions of equal opportunity, of enterprises in pursuit of different institutional ends. Alongside profit-oriented private enterprise and the various types of public enterprise, there must be room for commercial entities based on mutualist principles and pursuing social ends to take root and express themselves. It is from their reciprocal encounter in the marketplace that one may expect hybrid forms of commercial behaviour to emerge, and hence an attentiveness to ways of *civilizing the economy*. Charity in truth, in this case, requires that shape and structure be given to those types of economic initiative which, without rejecting profit, aim at a higher goal than the mere logic of the exchange of equivalents, of profit as an end in itself.

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

**Solidarityの定義は赤で示した部分：**  
Solidarityは、何よりもまず、全ての人に対して全ての人一人一人が持つ応答責任感（a sense of responsibility）のことであり、単に国家に任せれば良いといったものではありません。…であり、まだ「明確」とは言えない。しかしどうやらresponsibility（応答責任）と密接な関係があることはハッキリしてきた。それは、『Economic Justice for All』で述べられた「Subsidiarityはaccountability（発信責任）と密接な関係がある」と対称的だ。

**どちらの「主義」でもない「経済」の姿は見えてきたか**、というと、ある程度見えてきた、というところだろう。キーワードを拾うと、「単なる営利ではない原理による経済価値産出。」「商行為がハイブリッド形態をとることが期待でき、それによって、ways of *Civilizing the economy*（経済の市民化の様々な方法）への気づき（attentiveness）を期待できる。」「*Caritas in Veritate*（真理に根ざした愛、英語ではCharity in Truth）は以下の様なタイプの経済的イニシアチブに、形と構造（shape and structure）が与えられることを要求します。即ち、利益を拒絶せずとも、単なる等価交換の論理あるいは単なる利益追求の論理よりも、高次の目的を目指すような経済的イニシアチブに形と構造が与えられることを要求します。」などだ。

**universalism社会では、大きく分けると二種類の経済**、即ちarm’s length経済とnon arm’s length経済、この二つが発達していくと考えている。（[PPT「universalism社会の経済を構成する四種類の経済」](four%20kinds%20economy%20in%20society%20of%20universal%20individualism%20rev8.ppt)参照方。）…とコラム３４で述べた。

　この回勅『[*Caritas in Veritate*](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/encyclicals/documents/hf_ben-xvi_enc_20090629_caritas-in-veritate_en.html)』は、英語に直せば「Charity in Truth」であり、正に、このnon arm’s length経済について述べているのだと思う。

　恐らくこれが、**どちらの「主義」でもない「経済」、**なのだと思う。

　今週は以上。来週も乞うご期待。